

「説唱芸能〈唱南游〉の語り」 続編Ⅲ

訳・廣 田 律 子

※ 9 号・10号・11号に引き続いて訳を試してみる。

歌う わたし神娘は悟りを開く時に、もっぱら雄鶏のお前を食べよう。
鴨はわたしの恩人で、神娘は恩人に祭りをしたが、降臨しない。
神娘は黄い風呂敷包みを片づけ、祖師の供え台をしつらえる。
頭に神雲や神額をかぶり、身に神衣や神袴を着る。
足もとに占い具がおかれ、手で印を結び、口で盧山の玄妙な法の本を唱える。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角がぴいぴいと霊壇にひびく。

竜角が一度ぴいぴいと吹き鳴らされると、その音が盧山、茅山にひびきわたる。

雷や太鼓や竜角が、盧山、茅山、新州竜虎山の神兵神将、雷兵地将を香壇の上に迎える。

竜角が一度ひびくと、三つの祭壇の諸神は得勝壇に集まる。

三回鳴らされた竜角が雷のように震って川を干し、海を干して、妖怪を捉える。

台詞 妖怪が淵にもぐると、神娘は神鞭を振り回して妖怪をこなごなにした。
一つ捉えれば、ちょっとふいてやる。妖怪は逃げて川の蟹になる。

歌う 野菜の生える飛雲渡のあたりに、川の蟹や蟾蜍が落とされた。
祭りをする瑞安の民衆は、盧山の大恩人と呼びかける。
ここに來られて妖怪を退治してくれた功労は大きい。あなたはどこから、お名前は何というか。

神娘は名前を言った。ここでよけいな話を止めよう。

衆人は千両の銀を出して、神娘に申す。

この地方の百姓の暮しは貧しいので、全部で千両の銀しか出せない。

お茶代ぐらいの謝礼を神娘に差し上げて、飛雲の人たちの気持ちを表すばかりだ。

出された白銀を受取らない代りに、木を抜いて竜宮を建てる。

神娘は悟りを開く時、飛雲に来てこの宮で休もう。

内壇娘に一駕、雲一片、飛雲渡には太陰宮がある。

盧山の神娘は別れを告げて行き、飛雲の民衆は見送る。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と汪、楊の二将はそれを分けて享ける。

この「夫人伝」に盧山の法のことはさておき、話を变えて、後にまた続けて語ろう。

この「夫人伝」に、平陽霊門に住んでいる、神の本を語る邱姓のことを語ろう。

苗字は邱、名前は邱進、奥さんは傅氏という。

息子の邱富は十九歳で、三分の神骨が身についている。

邱進は神を祭り、仏を拝み、鶏や鵝鳥の心臓、豚の舌などを盗んで無茶苦茶に食べる。

邱富が何事をするかと聞かれたら、毎日柴刈して暮す。

三月十五日には、玄壇殿の神の誕生日を迎える。

台詞 三月十五日は玄壇さまの誕生日だ。当番は二人。一人は張慶と言い、もう一人は李寿と言う。なお四人の当番は先に玄壇殿に入って祭りをする。この日に、邱進は早く玄壇殿に来て、太鼓を敲き出す。

李寿は張慶に、「玄壇の太鼓が敲かれた！俺たちはそこに行って見よう。大勢が来るだろう！祭りをしてから供物を皆に配ってやろう。」二人は行ってみると、邱進一人しかいない。

「邱先生、祭りの火をつけなさい！」「当番さん、今日、俺は大変忙しい。上村では土を掘って願ほどきをしてやり、下村では俺に宴席の祝いをさせた。豚の頭はよく煮えたか。早く担いで来て、祭りをしてから皆に福を配ってやろう。今日、俺の仕事はぎっしりで、君たちに手伝ってもらいたい。」

当番は供え物を担いで来て、玄壇殿の中で祭りをする。

邱先生は供え物を並べておいて、「豚の頭、鵝鳥を中におき、鶏をそ

の側におき……」

「君たちは素人だ。供えかたが分からない。このように並べておくものだ。豚の頭はここに、鵝鳥はここに、鶏はここに。」と邱先生は言った。清水をあげるため、一人を水を汲みに行かせ、もう一人に火の種をつけるように行かせた。番組の人が離れたのを見ると、彼は豚の舌、鶏の心臓、鵝鳥の心臓を盗んで、紙で包んだ後に、それを玄壇さまの神衣の中にしまっておいた。

二人の当番の人は清水を汲んで来て、火の種を持ってきた。仏の灯をつけた。邱先生は神の降臨を請い、祈りをして、神の旨を知らせる。……太鼓を敲き出す。

外にいる人たちは太鼓の音を聞いて、「今年の当番は大変真面目だ！太鼓が何回も敲かれた。俺たちは福を受けに行こう。」と言う。皆は玄壇殿に集まった。

当番のおじさんは大変真面目だ。当番するにはやはり金持の方がいい。

豚の頭は二十四斤、鵝鳥の肉は八斤半、鶏肉は六斤以上。

衆人の中から一人が出た。豚の頭をあけてみると、舌がない。鵝鳥には心臓がない、鶏にも心臓がない。

衆人の中のもう一人は彼に反駁した。他の人のことをでたらめに言うな。去年、君の豚の頭の重さは八、九斤しかなかった。鵝鳥も鴨の大きさ、鶏も小さいものだった。

張慶、李寿、人のあらを探すな！早く祭りをしてから、皆に福を配ってやろう。またくどくどしゃべるなら、君を逐い出してやるぞ！

去年、俺は当番だった。鶏の心臓がなくなったから、皆に罰された。俺の家には金がないから、家内の着物を質に出した。今まだ請けだすことができない。

今年、鶏の心臓、鵝鳥の心臓、豚の舌がなくなったから、張、李も罰されるはずだ！

罰するはずだ！罰するはずだ！

張慶と李寿はそれを聞いて、口をきかない。

しばらくすると、張慶と李寿は、罰しないでくれ、罰されると不吉に

なる！

そんなら、誓いを立てなければならぬ。張慶と李寿は玄壇さまの供え台の前で誓いを立てる。

「玄壇さま！供え物は俺張慶の煮たもので、李寿はそれを持って来た。鶏の心臓、鵝鳥の心臓、豚の舌を盗んだら、一家の者は玄壇さまの判断に従う。」

「玄壇さま！供え物は張慶の煮えたもので、俺李寿はそれを持って来た。もし悪心を起したことがあるなら、家中の八人が玄壇さまの前で死んでしまう。」

「大変な誓いを立てた、誓いが大変だ！邱先生、君もこっちに来て、誓いを立てなさい。」

「先生は少しの謝金しかもらわないから、誓いをさせなくてもいいじゃないか！」とある人は言った。

「彼も誓いをすべきだ！邱先生、君もそこに行って少し話をしなさいよ！」とある人は言う。

「俺が供え物の心臓や舌を盗んだら、不吉なことに逢い、あるいは気持ちの悪いことが起る。」と邱先生は言う、と、「君はごまかすのか。もっと真面目に誓いをせよ！」

邱先生は迫られて止むを得ず、「俺が盗むことがあれば、息子がそれを食べて不運な目に逢う。」と言った。息子邱富は毎日山で柴刈をして家中の人を養う。

歌う 当番の人のひどい誓いが、因果応報として若い邱富に当たった。

正一玄壇さまは咎めて、猛虎を深山の草叢へ放した。

仏を拝んだ衆人は福を受け、邱先生は鶏の心臓、鵝鳥の心臓を持って家に帰った。

台詞 盗んだものが刻まれて井一杯になった。それが邱富のおかずにされた。邱富は「昨夜可怕的夢を見た！」と言う。「長く眠ったら夢が多い。どんな夢を見たか。」「一つの夢では、山が崩れて石がごろごろ落ちた。」「お前は日頃思うことが夢になるだろう。お前は毎日山で柴刈をするからね。」

「もう一つの夢では、俺は赤い頭巾を被っている。」邱先生の奥さんは、
「お前は少年の時に、舅母の家に行ったことがある。舅母はお前を可愛
がるから、一枚の赤い袋を与えて、お前の頭に被らせながら、赤い頭の
猫が来た、と言ったことがある。」と言う。

歌う 皆の誓いや母の言うことが、全部若い邱富の不運に当たった。
柴刈仲間たちが来て、大きな声で呼んだ。

台詞 「邱富のお兄さん！一緒に柴刈に行かないか。」「今日、俺は行きたく
ない。頭痛がしてたまらない！」「柴刈に行こうよ！俺は君を助けてやる。
担ぐことができないなら、俺は担いでやる。行きたくないなら、俺は君
を持ち上げて行くぞ！」と言う。邱先生の奥さんは、「富ちゃん！友だち
はこんなに親切で、お前は柴刈に行きなさいよ！」と言った。

歌う 邱富は高山の峰に登って、ひゅうひゅうと吹く風の音を聞いた。
この怪しい風が人を驚かして、凶か、吉かどういいうわけか。
風が木にぶつかったり、風が風にぶつかったりして、深山の森から猛
虎が出てきた。

柴刈の仲間はびっくりして、一生懸命に逃げ去った。

邱富の命が傷められて息切れた。猛虎は深山の森に帰って行った。

台詞 柴刈の仲間は集まると、「邱富のお兄さんはどうだ。俺らは探しに行
こう。」「おや！邱富お兄さんは地面に倒れた。体中が血塗れになった。
大変だ！」

歌う 柴刈の仲間は邱富を持ち上げて、急いで邱宅まで持ち上げた。
その茅屋に着くと、伯父さん、伯母さんを大声で呼んだ。
邱富お兄さんは虎に逢った。虎に傷められて息が切れた。
二人の老人は驚かされて気が遠くなった。柴刈の仲間は大声で叫ぶ。
伯父さん、伯母さん、早く醒めて下さい。呼び声が二人の老人を醒し
た。

二人の老人は悲んで泣き出して、悲痛の涙をはらはらと落とす。

台詞 この事を覚えた神娘は来た。神娘は竜鳳の占いをしてみた。平陽の霊
門、伯父邱進は神や仏におすがりする。伯母は傅氏。邱富は父の盗んで
来た鶏や鵝鳥の心臓を食べたので、玄壇さまに咎められて、放された猛

虎に命を落とした。邱富を助けに行かなければならない。「二人の將軍!」「はい!」

歌う

汪、楊の二將は道案内して、盧山の陳太陰はついて行く。

平陽靈門の邱宅に着て、通知された邱進は出迎える。

あなたは何処からのお嬢さんか。どうして家に来られたのか。

家に大変な出来事があるから、あなた方を留める気にならない。

わたしはお宅の出来事が分って、言わなくてもよく分る。

邱進さんは神に頼ったり、仏を拝んだりするが、盗んで来た鶏や鵝鳥の心臓を邱富に食べさせた。

正乙玄壇さまは咎められたから、邱富が虎に逢って命を落とした。

あなたは何処からの少年か、一部始終をよく知っている。

わたしはここに来た少年ではなく、盧山の陳神娘がわたしの法名だ。

道中で妖怪を退治して人を助けたが、わざわざ邱富を助けるためにお宅に来た。

台詞

「家の邱富を助けるために、何が入用か。」「板の扉一枚、青い薄絹の帳一張。祖師の壇を立て、竜角を三回鳴らすと、彼を助けることができる。」

邱進は板の扉、薄絹の帳、祖師の壇の用意をととのえる。

神娘は前へ進んで、片方の手がなくなった邱富を見かけた。邱富の片方の手が虎にかみつかれて落とされた。五虎を壇に呼びつける。

「邱先生! 君はドラを敲きながら、道で皆に話をせよ。俺邱進は神や仏におすがりして来たが、盗んで来た鶏や鵝鳥の心臓を邱富に食べさせたから、玄壇さまは咎めて、虎を放して邱富の命を落とした。今、盧山神娘は彼を助けるために、虎を壇に呼びつける。これは可怕いこと! 皆さんはこっちへ集まって、静かにして! 静かに!」

「ドラはない。」「一枚借りて来なさい!」

「借りることはできない! 彼は借りて来たものを返さないから、怒られて、貸してもらえない。」

「借りることはだめなら、足あぶりの蓋でも敲いて音を出せるだろう。」

邱先生は足あぶりの蓋を持出して敲く。道で敲きながら話し出す。
「皆さん、聞いてください。」「彼の言うことを聞くな。皆を集めて、彼は何かを盗みたいだろう。」「俺たちはわざわざ行って、皆でにぎやかにやりたい。」

歌う 神娘は黄い風呂敷の包みをあけて、法器を出し、祖師壇をしつらえる。
頭に神雲や神額を被り、身に神衣と神袴を着る。

足下に占い具が置かれ、手で印を結び口で盧山の玄妙な法の本を唱える。

九層の台に変じられる九枚の紙、四本の竹に変じられる四本の灯心草を取り出す。三に三をかけて、手で九回続けて印を結ぶと、九層の台が高く聳える。

神娘は九層の台の真中に上がった。壇に立ち、法を行って威風を振う。
左の手に鈴を持ち、右の手に竜角を持って、竜角の音がびいびいと霊壇にひびく。

二回目の竜角がびいびいひびくと、その音が盧山、茅山にひびきわたった。

神兵、神将、雷兵、地將、三つの壇の神々は得勝壇に集まる。

三回鳴らされた竜角が雷のように震って、五匹の虎が壇に上がって人を驚かす。

台詞 「邱宅には独り子しかいない。どれがその独り子の命を傷めたか。

三回頷いてくれ。」一匹の白面の虎が三回頷いた。「お前悪いやつが彼の命を傷めた。彼の手を吐き出して返せ。」

白面の虎は、喉にひっかかっている、神骨のあるこの手をやっと吐き出した。神娘はこの手を取り、神剣を振って、猛虎の頭を切り落とし、猛虎の尸を海の中へ投げた。神娘は邱富の手を秘訣で彼の腕にくっつけた。

歌う 霊験のある護符四枚を貼って、生き返させる霊符を胸に貼っておく。

神娘は印を結んで、何回も煉ると人間の姿に変じさせる。

その前で祖師の供え台をしつらえ、祭壇を立てて法を行って人間を済度する。

頭に神雲と神額を被り、身に神衣と神袴を着る。

足で八卦を踏み、手で印を結び、口で廬山の玄妙な法のお経を唱える。

左の手に鈴を持ち、右の手に竜角を持ち、竜角の音がびいびいと霊壇でひびく。

二回目の竜角の音が廬山、茅山を通り、三回目の竜角の音がびいびいとひびく。

竜角の音が九重山を通して、邱富兄さんは呼びよせられて香壇に上がる。

台詞 「おお！神娘！失礼した！失礼した！わたし邱富を助けて下さった。仏法を伝授してもらえないか。」「仏法を伝授して上げよう！願ほどきのことを司る。願ほどきする人があれば、君はその願いを受け入れて、帳消しにしないで。」「神娘にお礼を申す！」

歌う 内壇小衆神一駕、願ほどきを司る邱さま。

息子を助けた神娘の功労が大きい。陳と言う方にどんなお礼を申していいか。

わたしに恩返しをするには及ばないが、南江で蛇を斬殺して兄を救う時に援助して下さい。

神娘は俺の大恩人のお姉さんで、神娘の加勢に行くのは当り前のことだ。

内壇小衆神一駕、邱宅の庁堂で法の本を写す。

法の本を写して邱富に読ませて、神娘は廬山の法を伝授する。

神娘は邱富を助けてから、玄壇に向かって抗議する。

君はどんなに立派な神であっても、百姓を害すれば逐出されるはずだ。

正乙明威は天将と称するが、全然道理のないことをやった。

鶏や鵝鳥の心臓を食べたことで、君は虎を放して人を殺すべきではない。

邱老夫婦にはこの独り子しかいないから、彼等の養老を誰に頼ることができようか。

幸いに神娘は彼を助けてやったが、君玄壇の罪は軽いものではない。

神娘！俺は法を伝授するために天上に行った。この殿門を守ることを

土地に任せた。

土地は虎を放して邱富を殺した。俺正乙は全然知らなかった。

玄壇さま！手下が不正なら早く教訓を与えるべきで、手下が罪を犯すなら主人の責任だ。

神娘は俺に教訓を与える必要がない。君がどんなに俺を対処するかを見たいものだ！

当地の霊門に留まってはいけない。他の地に行ってお香や灯を受けなさい。

ドウー！玄壇はあせってぷんぷんと怒って、口を開けば悪言ばかりだ。

君は俗世で六年暮した子供で、俺は天上の大將軍だ。

君は俺を移転させるというなら、玉敕を手につつより外には方法はない。

君はここでさわりではいけない。早くこの廟門から出て行け！

彼は権力の大きいのを自慢しているが、この地方で横行することは絶対許されないと神娘は考えた。

神娘は符呪を書いて焼くと、符呪を司る天上の仙人は天門を出る。

一匹の靈霄馬に乗って、平陽の霊門に降臨した。

わたしは文書一通をあなたに渡して、三天門まで送るように頼む、と神娘は言う。

わたしに代わって玉帝の前で玉敕を願って、玄壇神をここから逐出するように乞う。

符呪を司る役人は符呪の文書を持って、神娘に別れを告げて立つ。

符呪を司る役人は頼まれたように急いで行くと、その光が三天の靈霄門まで通った。

偶に遇った大士観音仏は、神娘を呼んだ。

お前の文書をわたしは受取った。わたしが玉帝の前で玉敕を請ってやろう。

玉敕を頂いたならお前に渡そう、玄壇神は無茶にも人を害したのだから。

お前はわたしの仏の血から生まれたのだから、お前をいじめるなら、

わたし観世音を侮ることになる。

玉帝の前で玉敕を請ってから、お前に渡して玄壇神を逐出することができる。

弟子はまだ三枚のおみくじを受けていないので、聖母よ大経令をわたしに賜わって下さい。

弟子はこのお経を唱え、祭りをする家は聖母の供え台の前で仏灯を点す。

聖母の供え台の前で経令を請うと、弟子はそれを捧げて経文を唱える。

台詞 弟子は舞台の上でご命令を請い、身に長い着物を着、手に聖母のご命令の旗を持って三回聖母を拝み、旗を左右に振回し、大声で叫ぶ。

歌う 仏母は雲の上で見し、神娘は玉敕を高高と持ち上げる。

玄壇神は玉敕を見ると、びっくりして顔色がなくなる。

神娘、俺は間違いをした。甘んじてこの霊門から出て行く。

玄壇は神明たちを率いて、平陽の霊門から移転して行った。

ただちに、霹靂一声で、がらがらと玄壇の古い殿門は崩れてしまった。

玄壇さま！君は城外の八角橋の端へ行って香火を受けなさい。

神娘が悟りを開く時に、君の向かい側に太陰官が建てられるだろう。

君はあの黒い虎をつれて行って、今後、了見の狭い神であってはいけない。

外壇大衆神一駕、玄壇は新しい殿堂に安座する。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と汪、楊二人の將軍はそれを享ける。

次に飛霞嶺に着き、飛霞嶺のすそに犬の尸がある。

台詞 「二人の將軍！ここに犬の死骸がある。君たちはそれを拾って救ってやろう！」神娘は言う。

「人間なら、救うべきだが、犬なんかを救う必要はあろうか。」「犬は義気のあるものだから、今、その骸骨を並べて救ってみよう。」

歌う 汪、楊の二將は犬の骨を並べ、廬山の神娘はそれを処理する。

頭、尾、四本の足に毛をつけ、泥で作った心、肝を胸の中に入れておく。

一本の神剣を手に持って、方々の山や川を指す。

五方から犬の魂を呼び戻して、一匹の犬がいきいきと蘇った。

蘇った犬は爪先で気持ちを表わし、頭を振り、尾を振って、神娘にお礼を言う。

台詞 「犬！お前はわたし神娘のことを心にかけなくてもいい。お前はどこの家から出て来たか。その家に戻って行け、よく門番をして、お金を守れ。」と神娘は言った。

歌う 蘇った犬は神娘の言うことが分って、頭を振り、尾を振って立って行く。

神娘は飛霞嶺に着いた。そこに銀のような白い骸骨がある。

台詞 「お二人の將軍！そこに白骨がある。君たちはそれを並べてごらん。」
「この人を救ってはいけない。この人の顎の骨は尖っている。こんな人は態度を一変して人情を顧みない者だ。あなたは彼を救うこと勿！」と二人の將軍は言う。と、「どうして人を救うことをしないか。」と神娘は言う。「あなたは彼を救ってやるなら、後悔すること勿。」「人を救って後悔することか、後悔はしない！」「よし！」

歌う 汪、楊の二將は骸骨を並べ、廬山の神娘はそれを救う。
黄土の泥を体に変じ、水を血に変じる。摘んで来た茅の根を筋として並べておく。

心、肝、肺、腎などを作って、内臓全体をそろえる。

魂を返す髪を頭につけ、魂を返す衣を体につけておく。

各々靈験のある符呪四枚を貼り、生き返させる符呪を胸に貼っておく。

廬山の神娘は印を結んで、何回も整えてやると人間の姿に変じさせた。

その前で祖師の供え台をしつらえてから、祭壇に立って法を行って人を救う……。

雷が震うように三回竜角がひびくと、峰の上で災難に逢った者は生返った。

生き返って手足がひくひく動きだし、顔立ちももとのようになった。

生き返ってしゃくりもでき、おや！眠い、眠いと叫び出す。

台詞 「お兄さん、君はここで眠ったのか。」と神娘は聞くと、「ここで眠った。眠るうちに冷汗をかいだ。」「君の骸骨は地面にちらばっていた。わ

たし神娘は君を助けてやった。」

「俺の骸骨が地面にちらばっていたと言うか。お前娘の口は悪言を出して、俺をばかにしている。」

「この人はだめだ。わたしは一言しか言わなかったのに、彼は垣をこわすように、ぶつぶつ言っている。」と神娘は言う。

この人はどこの者か、わたしは占ってみよう、と神娘は思った。この人は樟州下南の人で苗字は馬、名前は馬扁三だ。兄弟五人、四人は海賊をはたらく。馬扁三は自分が盗賊になりたくないと言って、担い荷で生絹を売る。生絹を売るため、朝早く起きたり、夕方おそく帰ったりする。ある日、他人の祭壇で生絹を晒したので、峰の上まで人に追いかけて、打殺された。その骸骨が地面に散らばった。わたし神娘は彼を救った。

「お兄さん！君は樟州下南の人か。」「そうだ！そうだ！」

「君兄弟五人だろう。」「お、お、二対半だ。」「四人は海賊をはたらいたのね。」「お姉さん！そのことを言わないで、そんなことを言ったら先祖も不運になる！」

「君は三番目、馬扁三！」「お！俺はまさにそのとおりだ！」

「君は生絹を売るのか」「俺は生絹を売る！」

「生絹を売るため、夕方にそれを祭壇で晒したので、峰の上まで人に追いかけて打殺された。わたし神娘は君を助けてやった。」

「お姉さん、俺の生絹を売ることを言ったね。俺の担い荷は。君は弁償してくれ！」

神娘は印を結んで、摘んで来た荷の葉二枚を担い荷に変じた。色とりどりのものが本当にきれい。

「担い荷はよろしい、色とりどりだ。俺の天秤棒は。」

「君の天秤棒だ。」と神娘は言う。彼女は一本の黄金の柴を折って、一本の天秤棒に変じて、彼にやった。

「かごの底は空になった。俺の品物を弁償してくれ！」と無茶を言う。

神娘は印を結んで、摘んで来た一握りの柴の葉を色とりどりの品物に変じた。「馬扁三、君の品物はここにある。この色とりどりのものはそ

れなのだ。」

「お姉さん！俺はまた銀がある。千両の銀貨がある。五百両売り出した。君は俺の銀をなくしてしまった。」

「馬扁三、君の言いかたはひどすぎる！腰かけから卓に上がる。卓に上がると仏堂に上がるのだ。そんなことをしてはいけない。」

「俺は銀だけ返してもらおう。誰が君の仏堂なんかに上がろうか。君は銀を返してくれ！」

「この人は態度を一変して人情を顧みない。わたしは彼を隅に押し込んでおこう。」と神娘は言う。「扁三、銀を弁償しなければならないなら、門前の草叢にある岩の下にある。それを取りに行け！」

「ない！」「もっと奥の方へ！」「ない！」「ずっと奥の方へ！」人間としてお前は悪党だ、助けてやれば人を害するだろう、と神娘は考えた。彼を隅に押し込んでおけば、外の人に見つかってびっくりするだろう。それはいけない。馬扁三が岩の下に這って行くと、神娘は神風で扇いで、彼はもとの一片の骸骨になった。

歌う

廬山神娘は嫌気が差す。飛霞嶺で犬を救った。

救われた犬は義気があり、頭を振り、尾を振って神娘にお礼を言う。

犬は粗末な食物を食べながら義気があり、人間は米を食べて良心がない。

畜生は済度しやすいが、人間は済度しがたい。丹薬を煉て白骨を生き返させることはしない。

丹薬を煉て白骨を生き返させることはしない、と言うが、もっぱら災難に遇った善良な人を救う。

丹薬を煉て白骨を生き返させることはしない、町の石の柱の頂に金の冠を被るより外には。

黄金の柴の枝が殿堂の柱になれば始めて、丹薬を煉て白骨を人間に生き返させる。

鉄の木が花を咲かせ、馬の頭に角が生えて始めて、丹薬を煉て白骨を人間に生き返させる。

鉄の木が花を咲かせず、馬の頭に角が生えなければ、丹薬を煉て白骨

を生き返させることはしない。

丹薬を煉て白骨を生き返させるには、高山が踏まれて平地になれば始めてできる。

高山や峰に逢えば、いつまでも丹薬を煉て白骨を生き返させることはしない。

「神娘！あなたのお話は間違った。」と汪、楊の二将は言う、「わたしの言うことはどうして間違ったか。」「丹薬を煉て白骨を生き返させることはしない。と言ったのね。お兄さんは南江殿にいて、彼を救うために、丹薬を煉て白骨を生き返らせなければならないだろう。」

「おお！わたしはお兄さんのために廬山に行って、千万の苦しみを嘗めて来た。お兄さんを救わなければならない。他人をも救ってやるべきだが、皇帝さまの貴重なことばがあれば始めて丹薬を煉て白骨を生き返させることとしよう。」

歌う 神娘が飛霞嶺で言ったこの言葉は、後にお経の訣になり、さらに教典になった。

内殿で紙銭三枚を捧げて、神娘と汪、楊の二人の将軍に。

この『夫人伝』に廬山の法のことはさておき、話を変えて、後にまた続けて語ろう。

『夫人伝』には、紅江の渡場に住んでいる林姓のことを話す。

金持の員外林金貴、奥さんは応氏と言う。

正月の九日に貴い娘が生れて、名前は林九、林太陰だ。

林九はまだ、天然痘にかからず、今年の天然痘を司る当番は仏の令公だ。

一日、二日目に天然痘の影が見え、三日目、四日目、に天然痘が出て来た。

目上の両親は仏を敬うことをせず、庚申、甲子の日に家畜の糞を掘り出したりする。

朔日と十五日に神祭りをせず、張三令公はこの地方のことを司る。

毎度の食事に油で葱などを炒めることで俗世の人たちは張三令公に咎められる。

張三令公が咎めたので、天然痘がひどく彼女に祟った。

彼女は顔に二重の天然痘ができ、医者薬を飲んでも効かない。

占いをすると不吉、仏の前でみくじを引いても見込みがない。

定まった命数によって命が尽き、林九の魂は冥土に行った。

内壇娘々馬一駕、林太陰は亡くなった。

彼女を絹の着物に着かえさせて棺に入れ、林九林太陰は納棺された。

棺を荒野に置き、道士や和尚を家に招く。

林九さまの功過を済度して、両親は悲しんで涙をほろほろ流す。

悲しみに沈んだ二人の年寄りの、怨めしい気分が風に吹き払われた。

神娘は竜鳳の占いを行ってみると、紅江林太陰のことが分かった。

台詞 おや！紅江渡の伯父林金貴、伯母応氏。林九お姉さんは天然痘で亡くなった。

彼女を救助しなければならない。「お二人の将軍！」「はい！」「林九お姉さんを救助に行こう！」

歌う 汪、楊の二将は道案内して、廬山の陳太陰は後について行く。

紅江の渡場のあたりにある林宅に着くと、門番の知らせで林員外は出迎える。

あなたはどこからのお嬢さんか、なぜ拙宅に来られたか。

拙宅では大変が起って、あなた方を留める気はない。

お宅の心配なことを知っている。話さなくてもよく知っている。

お宅の林九お姉さんは、天然痘で冥土に行った。

あなたはどこから来た少年で、どうして一部始終をよく知っているのか。

わたしは他の地方から来た少年ではなく、廬山の陳神娘はわたしの法名だ。

道中で妖怪を退治して人間を助けて来て、わざわざお姉さんを救助するためにお宅に来た。

台詞 「おお！失礼した！神娘、ご免なさい、ご免なさい！家の娘を救助するために、どんなものを用意しようか。」「他のものはいらない。ただ扉の板一枚、青い薄絹の帳一帳、祖師の祭壇を立てて、竜角を三回吹き鳴

らせば彼女を救助することができる。」

員外は下男を遣わして、扉の板、青い薄絹の帳を用意し、祖師の祭壇を立てる。

「お二人の將軍！」「はい！」「棺を扉の板の側に置いて下さい。」と神娘は呼ぶ。

汪、楊の二人の將軍は、棺を扉の板の前に置いた。

神娘が神剣で一度刺すと、棺の蓋が開けられた。林九さまは支えられて扉の板に置かれた。「お二人の將軍！」「はい！」

歌う 棺を荒野に置いて、火でそれを焼き払う。

棺を荒野に置いて、雷火でそれを焼き払う。

神娘は神の呪文を唱え、風呂敷包みから法の珍宝を取出す。

四枚の靈験のある符呪を貼り、死者の胸に貼って、蘇生させる。

盧山の神娘は印を結んで、色々な方法で死者を生かす。

その前に祖師の供え台をしつらえ、祭壇に立って法を行って人を救助する。

三回の竜角がびいびいとひびき、その音が天地にひびきわたった。

張三令公は竜角の音を聞くと、林九の魂をその郷里に送り帰す。

令公は十四、仏の子がお経を唱える声を聞くと、林九の魂をその郷里に送り帰す。

内壇娘々一駕、外壇令公一駕、林九の魂が郷里に送帰された。

生き返って手足をひくひく動かし、生き返って顔立ちももとのようになる。

生き返ってしゃっくりもでき、口を開けて大声で叫び続ける。

林九の苦しみを知って、どこからの恩人、何と言うお名前の方がわたしを生かしたか。

わたしの家は福州の候官県にあり、臨水中村の陳姓の者だ。

父は上元と言い、母は葛氏と言う。長兄は法通、次兄は法青だ。

三番目の者は陳十四と言う。長兄は南江の蛇妖を退治に出かけた。

長兄は南江で蛇妖に殺されてから、次兄は家に帰って、その凶報を知らせた。

長兄を救助するために廬山に登って、師の奥さんに神娘と名づけられた。

三年法を習得してから、洞門を出て、お師匠さまは今後のことを言付けた。

先に庶民を救助し、その後で兄を救助せよ、と言付けられた通りに、道中で妖怪を退治して民衆を救助して来た。

男の人を助けると、兄弟と称し、女の人を助ければ、姉妹と称する。

後に神娘は悟りを開く時に、福をもたらし、お香火を受けて、この宮で休もう。

台詞 「神娘！あなたは家の娘を救助して下さった。彼女に仏法を伝授してもらえないか。」「お娘さんに仏法を伝授して上げよう。彼女は天然痘のことを司って、俗世の男女を加護する。あばたが一つ、多くても二つ。皆はきれいな顔つきを保つことができる。」「神娘にお礼を申す！」

歌う 内壇娘々馬一駕、天然痘を司る林太陰。

台詞 「令公は間違った。君は樓州江南県で天然痘の祟りで馬容をつれて行き、さらに紅江の渡場で天然痘の祟りで林九をつれて行った！わたしは天然痘の種を始末して、男女を加護する。令公はこれを司ることを止めなさい。」

歌う 廬山の法で天然痘の種が始末されてから、天然痘に関わる童はこのことを令公に上奏した。

陳十四、仏の子は、あなたの天然痘の種を紅江で始末した、と上奏した。

張三令公は怒って、直ちに雲に乗って紅江に来た。

台詞 「陳十四、陳十四！お前、お前！」

歌う 「天然痘の種を司る仕事は俺のことだ。みだりに紅江で天然痘の種をおさめるべきではない。」

おとなしく天然痘の種を返してくれば、遠慮してあしらってやるが。

天然痘の種を返してくれないと、お前がここで留まることは絶対許されない。

「君の天然痘の種をおさめることはやさしいことだが、それを返して

やることはできない。」

他の人はお前の盧山の法を恐がるが、令公はお前神娘を恐がらない。

わたしも恐がらない、わたしは一步も譲らない。君と法の戦いをして勝負を決しよう。

張三令公は天将を点呼し、点呼された天将は天兵を率いる。

盧山の神娘は六甲将を呼び出し、盧山、茅山の山洞の兵を呼び出す。

白雲が空にただよって、二人は向合って法の戦いをする。

色どりの雲の中で剣の影がきらりと光り、四海の内に風雲が起る。

五雷祖師は一本の剣を持ち、六丁六甲の大將軍が出陣する。

四陣を進めると三陣負け、八卦を招いて庇護してもらう。

九子九馬九牛の法、十十よく姿をくらます。

十人は一緒に色どりの楼を組立て、玄妙な法を持つ九子は九頭の牛に敵う。

八仙は集まって双竜の法を行い、七星宝剣や、一對の金の鉤を使う。

六丁六甲神兵は剣を持ち、五雷都総管は姿を現わさない。

四人の大元帥は一緒に法を行い、三教の祖師は身を庇護してやる。

双方を同様に扱う雷大王は、一声の烈しい雷鳴を天下にとどろかせる。

五昼夜戦い続けて、勝負がなかなかつかない。

監察星官は雷音寺にこのことを上奏して、大悲観世音に上奏する。

大慈大悲の雷音寺、監察の文書一部を呈上する。

令公と陳十四は、紅江でみだりに天然痘の種を争っている、と上奏する。

法の戦いを五昼夜戦い続けて、勝負がなかなかつかない。

仏母はわたしの上奏書を許し、仏の子と令公を和解させるようお願い申す。

香山仏母はその上奏を許して、監察星官は雷音を出る。

外壇小衆神一駕、天上の監察の星に捧げる雷音に上奏した功労は大きい、自ら徳勝壇で宝馬をもらう。

壇内大士一駕雲一片、香山仏母は雲に乗る。

雲に乗って紅江渡に降臨し、千里眼と順風耳は情報を報告に来る。

台詞

「十四！仏母は降臨した！」「令公！仏母は降臨した！」

令公は仏母に「陳十四はよくない。」と申す。「どうしてよくないか。」

「天然痘の種はわたしの司るところだ。彼女はみだりにわたしと天然痘の種を争った。彼女にそれを返してくれと言ったが、彼女は帰してくれないばかりでなく、またわたしと法の戦いで勝負を決する。」

「仏母！彼の言うことを聞かないで下さい。天然痘の種が彼の司るところで、男女を庇護するはずなのに、ややもすれば、人の命を奪って行く。どうして許されようか！」と神娘は申す。

「馬容が彼女に呼び戻されて、もう彼女に送り帰した。林九も彼女に呼び戻されて、すでに送り帰した。」と令公は言う。

「おお！君の訴えに理屈がある。彼女の言うことにも理屈に合っている。令公！君は陳十四に任せてくれ。」「仏母！わたしは承知しない！」

「十四！彼に返してくれ！」「仏母！わたしは承知しない！」

「君たち二人は皆理屈がある。ただここで法の戦いをしても無駄事になる。わたしは君たちに和解させよう。天然痘のことを陳十四に任せ、麻疹のことを令公に任せる！同じ祭壇で法を守って、男女を加護せよ。病気がよくなおり、皆順調に成長するように。」

陳十四は天然痘の種を出して選ぶ。大きくて太いのを自分は留めておき、小さくて細いのを令公に与える。

歌う

内壇大衆馬一駕、香山仏母は蓮花に帰る。

天然痘の種を分けてやる功労は大きい、自ら徳勝壇で宝馬をもらう。

九月十五日に天然痘の種を分けて、同じ祭壇で仏法を守り、平安で健康であるように人々を加護する。

林宅は庁堂で祝宴を催して、盧山の陳太陰にお礼を申す。

林員外は五百両の銀を出して、陳十四にお礼を申す。

わたしは銀の謝礼を受けず、後に南江で蛇を退治する場合にお姉さんの援助を求めよう。

神娘はわたしの大恩人のお姉さんで、お姉さんを援助するのは当たり前のことだ。

内壇娘々馬一駕、林宅の庁堂で仏法のお経を写す。

仏法の本を写して林九に読ませ、神娘は玄妙な法のお経を伝授する。
神娘は黄い風呂敷包みを背負い、林宅の老若は見送る。
内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と汪、楊の二将はそれを分けて享ける。
この『夫人伝』に盧山の法のことはさておき、話を变えて、後にまた
続けて語ろう。

この『夫人伝』に、青龍江のほとりに住んでいる李宅のことを語って
行こう。

この役人の名前は李国界と言い、総兵の官位に就いてから家に帰った。
奥さんは金氏、男の子がなく、独り娘だけいる。

正月十三日の生れで、名前は李十三と言う。

もう十九歳になり、三分の神骨の持主だ。

金岳と言う人と縁組をして、花嫁として迎えられた。

李十三さまはやさしい人だが、神仏を敬わない李太陰だ。

正月十三日にすでに妊娠して、妊娠しているうちに歳月が経った。

川辺で着物を洗うと、汚水は竜王殿にしみ込んだ。

竜王殿から文書を出して、この文書は十殿王の手元についた。

十殿閻君は責めて、李十三を責める。

定まった命数が尽きないうちに命を落し、十三の魂がつれられて行く。

絹の着物や棺をそなえて、十三李太陰は納棺された。

その棺は荒野に置かれ、道士や和尚を家に招いて来る。

十三李さまを済度し、目上の両親は涙をほろほろ流す。

二人の年寄は悲しみに沈んで、怨めしい気分が風に乗った。

盧山の法を習得した神娘はこのことが分かって、盧山の神娘は考えを
めぐらした。

神娘は竜鳳の占いをしてみると、あの怨めしい気分が何処から吹いて
来たのか。

台詞 お！伯父李国界、伯母金氏、お姉さん李十三は難産で亡くなった。救
助に行かなければいけない。「お二人の將軍！」「はい！」「青龍江のほと
りに行って李十三お姉さんを救助しよう！」

歌う 汪、楊の二将は道案内して、陳太陰は後について行く。

青龍江のほとりの李宅に着くと、門番は李大人に知らせる。
あなたはどこからのお嬢さんか。どうして拙宅に来られたか。
拙宅には大変な心配ごとがあるので、あなた方を留める気はない。
お宅の心配事ごとを知っている。お宅は言わなくてもよく分かっている。

お宅の李十三お姉さんは、難産で冥土に行った。
あなたはどこから来た少年か、一部始終をよく知っている。
わたしはここに来た少年ではなく、盧山の神娘がわたしの法名だ。
道中で妖怪を退治して人を助けて来た。
わざわざお姉さんを助けるためにお宅に来た。

台詞 「おー！神娘に失礼した。ご免なさい！ご免なさい！わたしの娘を救助するために何を用意しようか。」「他のものはいらない。扉の板一枚、青い薄絹の帳一帳、祖師の祭壇を立てて、竜角を三回吹き鳴らせば救助できる。」

李大人は下男に命じて、扉の板、青い薄絹の帳をととのえ、祖師の祭壇を立てる。

「お二人の将軍、棺を持ち上げてきなさい！」と神娘は言う。
汪、楊の二将はおぼろげに、さっそく棺を扉の板の側に置いた。
神娘は神剣で一度刺すと、棺の蓋が上に上がった。李十三さまは支えられて扉の板に置かれた。「お二人の将軍！」「はい！」

歌う 棺を荒野に置いて、火で焼払って塵埃にする。
棺を荒野に置いて、雷火で焼いて凶星を退ける。
凶星は三千里以外に退き、吉星は降臨して家の中に入る。
神娘は生き返させる法を行って、霊験のある符呪を作って人を救う。
霊験のある符呪四枚を貼り、胸に貼って生き返させる。
盧山の神娘は印を結んで、かろうじてもとの人間の姿にかえす。
その前に祖師の供え台をしつらえて祭壇に立って法を行って人を救う。
九層の台は九枚の紙で組み立てられ、一つの呪文が唱えられると台ができた。
頭に神雲や神額をかぶり、身に神衣や神袴を着る。

足が八卦を踏み、手に印を結び、口で盧山の玄妙な仏法のお経を唱える。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角がびいびいと盧山、茅山にひびきわたる。

盧山、茅山、新州竜虎山、神兵、神将、雷兵、地將は三つの祭壇から徳勝壇に集まる。

二度目の竜角がびいびいとひびいて、その音が九重山にひびきわたる。

李十三さまを招いて、さっそく香壇に上がって来るように招く。

三度の竜角が雷を震うようにひびいたが、李十三を触てみると、息がないままだ。

おや！怪しいかな！神娘は言う。

わたしは三回竜角を吹鳴らせば、人を救うことができるのに、三回竜角を吹鳴らしても生き返らない。

まさか五方へ彷徨っている亡霊ではあるまい。竜角を三回吹鳴らして五方までひびかせる。

改めてお香を焚き、改めてロウソクを点け、竜角の音がびいびいと靈壇にひびく。

二回目竜角がどウーとひびいて、その音が五方までひびきわたった。

三回目竜角がびいびいとひびいて、急いで香壇に来るように李十三を招く。

六回竜角が雷が震うようにひびいても、李十三を触てみると、息のないままだ。

わたし神娘は三回竜角を吹鳴らせば人を救うことができるのに、どうして六回竜角を吹鳴らしても帰って来ないのか。

まさか望郷台で彷徨っている亡霊ではあるまい。三回竜角の音が望郷台までひびく。

神娘は改めてお香を焚き、ロウソクを点け、改めて鈴や竜角を持って、改めてすべてのものを整える。

改めて竜角をびいびいと吹鳴らして、その音が続いて靈壇にひびく。

再び竜角の音がひびき、その音が望郷台までひびきわたる。

三回目の竜角の音が、さっそく香壇に上がるように李十三を招く。

九回目の竜角が雷の震うようにひびいても、十三を触てみると、息のないままだ。

わたし神娘は三回竜角を吹鳴らせば人を救うことができたのに、九回竜角を吹鳴らしても帰せない。

十三お姉さんは天上の法律を犯して、苦しめられながら、地獄の門まで押送された。

台詞 「神娘！救助することはできるか、できないか。」と李大人は聞く。

「お宅の娘さんは天上の法律を犯した。暗い地獄に落とされたに違いない。寢室を一室貸し、寝具ひとそろい貸して下さい。七日間を期限にする。七日目に蘇らないなら、十四日目、十四日目に蘇らないなら長くて七七四十九日目、七七四十九日目に蘇れば、李十三を救助できる。蘇らないなら、わたし十四と一緒に納棺して下さい！」

「あなたはもうそんなに気をつかわなくてもいい！」と李大人は言う。

「廬山を出る時に、わたしの師の奥さんは、妖怪に逢えば斬殺して、災難にあった人を救出せよ！と言付けた。お二人の將軍！部屋の中むやみに動いたり、歩いたりしてはいけない！わたしは冥土に行ってみるから。」と神娘は言った。

歌う 神娘は寢室にはいって、寢台の上にある寝具の中で眠った。

法を行って俗世を離れて冥土に行き、息を殺して、早足で冥土に行く。

阿弥陀仏！

紫金炉の中から光がびかびかして、おぼろげに神霊が西方に御出座になる。

（聞いている人々は手に線香一本を持ち、芸人は『済度の呪文』や『心経』を唱える。）

香山仏母は蓮の花の上に座られて、仏の子が地獄の門に落ちたことが占いで分かった。

文書が十殿の地獄まで送られて、十殿の閻魔王はこのことが分かった。

金童及び玉女を遣わして、長い旗や天蓋を持っている。

わたしは金童と言い、妹は玉女と言う。長い旗や天蓋を持ってあなた

を迎える。

南無阿弥陀仏！

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。

左に長い旗、右に天蓋、白檀の香りが漂って道案内する。

門前には、陰陽の界で、石碑が山みたいに両方を分ける。

神娘はこの蓮の花の座席にお座りなさい。この地の関について話して上げよう。

この地は陰陽関と言い、如来仏祖は三界を分ける。

上下の三界を三人の王に分け、上方を玉皇の凌霄殿に分ける。中部を俗世の王の朝廷に分け、下方を冥土の王、菩薩に分ける。

上下の三界は三人の王に分けられ、石碑を通らないうちに俗世の地に属する。

石碑を過ぎると冥土で、陰陽の隔たりは一枚の紙のようだ。

陰陽を隔てる道は近いが、雄鶏が暁を告げても道は歩きにくい。

門前に三三、九本の道があるが、俗世の人々は善人、悪人に分けられる。

上方の三本の道が聞けば、善行を積む人はこの関の門を通る。

下方の三本の道が開けば、悪事をはたらく人はこの関の門を通る。

中央の三本の道が開けば、修行の人はこの関の門を通る。

善行を積む人が関の門を通ろうとすれば、冥土の土地は彼を出迎えて関を通らせる。

修行する人が関の門を通ろうとすれば、光が現われて関の門を通る。

悪事をはたらく人が関の門を通ろうとすれば、こちらにぶつかったり、あちらにぶつかったりして、道がない。

これはどういうわけか。俗世で高利貸をしていたから。

俗世でみだりに暴れたり、騙して財物を巻上げたりしていた。

そんな人は、関の門を通るには、こちらにぶつかったり、あちらにぶつかったりして道がない。

前生、前世で精進してただけで、神仏を拝まず、信者にならなかった。

そんな人は、関の門を通るには、いつも一對の竹絲灯にたよる。
一對の竹絲灯がかけられて、罪人が関の門を通るのに都合がよい。
(以下は『竹絲灯經』)

「朝夕気持ちがさっぱりする時に、さっぱりした気持で竹絲灯を学び始める。

一千か八百の銀でも買える処がなく、千両の銀でも竹絲灯を買いにくい。

竹絲灯を唱えだし、竹絲灯で済度する。

上方の三十三点の仏国を照し、下方の冥土の地獄の門を照す。

西方の大道を照して光を放つ。南無阿弥陀仏！」

門前の黄泉渡に着くと、黄泉渡のあたりに衆人がいる。

金童お兄さん、玉女お姉さん！

今来た処はどういう処か。その衆人はどうしていじめられているか。

神娘！ここは黄泉渡と言ひ、俗世からの善人と悪人が分けられる。

修行をする人は黄泉渡を通るには、金剛經を唱えて船賃が免除される。

善行を積んだ人は黄泉渡を通るには、六字の弥陀で船賃が免除される。

悪事をはたらいた人が黄泉渡を通るには、灯を探したり、火に炙られたりして大変だ。

黄金、珠、玉を好まないものはなく、とくに銀を貪ってきりが無い。

お前を帆柱先に釣り上げて、銅の槌、鉄の杵でお前をめちゃくちゃに殴る。

体の上部を殴ったり、下部を殴ったりして、悲しむかどうかとお前に聞く。

十八年の災難に苦しんだ後に、お前を人間として俗世へ帰らしてやる。

神娘あなたは俗世から来て、俗世の罪人たちを戒めてやりなさい。

俗世で善行を積みば、こんなにいじめられて悲しむことはないだろう。

外壇で冬着二十着、紙錢四百をやって、黄泉渡のあたりで一群の惨な魂を済度する。

内壇で紙錢三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。

左に長い旗、右に天蓋、白檀のお香のかおりが漂って導く。

門前には鬼門関、黄狗村があり、四匹の可怕的犬が左右にいる。

金童お兄さん、玉女お姉さん！

この地はどんな処か、ここの可怕的犬がどうして左右にいるのか。

神娘は蓮の花の座席におかけなさい。この地の関のことを話して上げよう。

この地は鬼門関、黄狗村だ。四匹の可怕犬は人間を辨えることができる。

善行を積んだ人が関を通ろうとすれば、犬は頭を振り尾を振って迎える。

修行した人が関を通ろうとすれば、関の側に伏して動かない。

悪事をはたらいた人が関を通ろうとすれば、可怕的犬が歯ざしりをして飛びかかる。

その悪人の着物を裂き、目をえぐり、内臓を裂いてお菓子にする。

台詞 「神娘！ここは鬼門関、黄狗村だ。俗世の可怕的犬は人間の身形を見るが、ここの可怕的犬は俗世の善人、悪人を辨えられる。歯ざしりをして目をえぐり、内臓を裂いてお菓子にする。この人たちはどんな人だったかと聞けば、これは俗世で高利貸しをし、目上の人に逆い、他人をいじめ、人を傷害したり、殺したりする者だった。」

歌う そんな人たちは関を通ろうとする時に、可怕的犬が歯ざしりをして飛びかかって来る。

悪人はいろいろと苦しめられた。彼に悲しいか、どうかと聞く。

彼は十八年の災難に苦しんだ後に、人間として俗世へ放される。

俗世で彼がどんなことをやるか、冥土の役所はまじめに考える。

俗世で善行を積みば、必ずしもいじめられて苦しむことはあるまい。

外壇で冬着二十着、紙銭四百をやって、鬼門関、黄狗村の関を通らせるように済度する。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。

前には長い旗、後ろには天蓋、白檀のお香のかおりが漂って導く。

門前に、左に金橋があり、右に銀橋があり、中央に奈何橋がある。

善行を積んだ人は関の門を通る時に、助けられて金橋を通る。

修行する人は関の門を通る時に、助けられて銀橋を通る。

悪行をはたらいた人は関の門を通る時に、中央の奈何橋を通らなければならない。

奈何橋の広さはどのくらいかと聞けば、それは三寸三分三厘だ。

橋の下の深さは万丈で、そこにある何匹かの毒蛇が人を噛む。

台詞 橋の下で苦しんでいる人は俗世で夫婦の仲を裂く者だ。女の方を唆して男の方と不和にさせる。男の方に女の方の悪口を言って、不和にさせる。

歌う こちらでわざとうるさくしたり、あちらでわざとうるさくしたりして、人の婚姻を裂いてしまう。

俗世の夫婦を裂いた者は、冥土の地獄に行く。

命数が尽きて亡くなって、地獄の門まで押送されていじめられる。

十八年の苦難に苦しんだ後に、そんな者を虫けらや犬などとして生かして俗世へ送る。

神娘は俗世からここに来て、俗世の罪人たちを戒めて下さい。

善行を積むか、悪行をはたらくか、その人自身が決めることだ。その人がどこから来たかは関係ない。

俗世で善行を積めば、必ずしもいじめられて苦しむことにはなるまい。

外壇で冬着十着、紙銭一百、奈何橋の下の惨な魂を済度する。

南游で功德を成して、済度して紙銭をやる！

神娘は生命を救う呪文を唱えて、その冤罪を免じて災難を解除してやる。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。

左に長い旗、右に天蓋、白檀のお香のかおりが漂って導く。

門前にこの第一殿に着いた。

(お経を聞いている衆人は手に一本の線香を持つ。)

二本の線香を添えて寿命を添え、福が高く、寿命が長い。

聖母は第一殿に来る。一殿には秦広大士王がいる。

秦広大士王は迎えに出て、盧山の陳神娘を迎える。

何事があるかと神娘に聞く。どうしてこの一殿に来たか。

李姓のお嬢さんのために来た。彼女は難産で亡くなった。

九回竜角を吹き鳴らしても、生き返らなかった。今、李姓の人を帰らして下さい。

昨夜、十三は一殿で審問された。今日は二殿で自供させられる。

神娘は別れを告げ、閻魔王は見送って、盧山の陳太陰を見送る。

外壇で閻魔王に馬一匹、一殿の秦広王に捧げる。

聖母を迎えたり、見送ったりする功労が大きく、自ら宝の馬をもらって俗世を加護する。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。

左に長い旗、右に天蓋、長い旗や天蓋が道案内をする。門前に鶏卵山についた。盧山の神娘は話をする。

金童お兄さん、玉女お姉さん！

今来た処はどこか、どうして人々はいじめられているか。

神娘は蓮の花の座席にお座りなさい。ここの関のことを話して上げよう。

台詞 「ここは鶏卵山と言う。その山の上で苦しめられている人は、卵を盗む者だ。」「うそをついている。自分の家で鶏を飼って、卵を食べることはどうして罪になるか。」「そうじゃない！それは卵を盗んで食べる者だ。ある家に、仕事のよくできる嫁がある。卵を盗んだ人は、その家に飼っている鶏の生んだ卵を盗んで食べた。それで、その嫁は姑に殴られて悲しんだ。その鶏も殺された！」

歌う 鶏の魂が散らずに起訴して、卵を盗んだ人を罪のある者として起訴した。

主人はわたしを飼って功労が大きいから、卵を生んで主人にお礼を言うはずだ。

お前は俗世で卵を盗んだため、わたしが殺された。

命数が尽きて亡くなって、いじめられながら地獄の門まで押送されて行った。

十八年の災難に苦しんだ後に、鼠として俗世に生まれ変わる。

鼠がどんな人の生まれ変わった者かと聞けば、もともと卵を盗んだ婦人

だ。

神娘は俗世に帰る時に、俗世の罪人たちを戒めて下さい。

その罪を免じて災難を解除してやると徳になり、夭死した魂を済度する。

俗世で善行を積み、必ずしもいじめられて苦しむことはあるまい。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。

左に長い旗、右に天蓋、白檀のお香のかおりが漂って導く。

この第二殿の門前に着いた。二殿には楚江大士王がいる。

楚江大士王は出迎えて、盧山の陳神娘を迎える。

神娘！あなたは西天仏の子として名望があるが、何のためにこの二殿に来たか。

冥土の神さま！わたしは李十三のために来た。彼女は難産で亡くなった。

九回竜角を吹き鳴らしても帰って来なかった。李十三を返えてもらいたい。

昨夜、李十三は二殿で審問されたが、今日は三殿で自供を聞かれる。

神娘は別れを告げ、閻魔王は見送って、盧山の陳太陰を見送る。

外壇で、閻魔王は馬一匹、二殿の楚江王は安座する。

聖母を迎えたり、見送ったりする功労が大きく、自ら宝の馬をもらって俗世を加護する。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。

左に長い旗、右に天蓋、長い旗や天蓋が道案内をする。

門前に紫香山に来た。盧山の神娘は話だす。今来た処はどこか。この関のことを聞かせて下さい。

神娘は蓮の花の座席にお座りなさい。ここの関のことを話して上げよう。

台詞 「ここは紫香山と言う。ここで苦難を受けているのは俗世で仏を拝むお婆さんだ。」

「仏を拝むお婆さんはどうしてここでいじめられているか。」

「これらの仏を拝むお婆さんは、もっぱら外で巧みなうまい話をして、

仏の名義でお金を騙し取る。普陀山の観世音が靈驗を現わしているから、お金を出してわたしに焼香させて下さい、と言う。彼女はこちらを騙したり、あちらを騙したりして、騙し取ったお金を濫用した。それで紫香山まで押送されて来ていじめられている。」

あるお婆さんは廟内に行って読経するが、しきりにこの人が何とか悪事をするとか、あの人がよくないとか言って、他人を誹謗する。

ああ！皆さん！

歌う 俗世で人間としてどんなことをやったか、冥土の役所はまじめに扱ってやる。

命数が尽きて亡くなってから、紫香山まで押送されて苦難を受ける。

十八年の苦難に苦しんだ後に、人間として生れ変って再び俗世へ行かされる。

神娘は、俗世からここに来た。俗世の罪人たちを戒めて下さい。

お寺に行って読経する気があるなら、真心を込めて、悟りを開くことができる。

もし、俗世で不正をはたらくなら、罪つくりしながら仏門に入ってはいけない。

外壇で冬着十着、紙銭百を捧げて、紫香山の魂に配ってやる。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。

左に長い旗、右に天蓋、白檀のお香のかおりが漂って道案内する。

第三殿の門前に着いた。三殿には正に宋帝王のいる処だ。

宋帝大土王は出迎えて、廬山の陳神娘を出迎える。

神娘！あなたは西天の仏の子で、高貴な方だ。どうして俺の処に来たか。

わたしは李十三のために来た。彼女は難産で冥土に行った。

九回竜角を吹き鳴らしても、生き返らなかったから、李姓のこの人をわたしに返して下さい。

昨夜、十三は三殿で審問されたが、今日は四殿でその自供を聞かれる。

神娘は別れを告げて、閻魔王は見送って廬山の陳太陰を見送る。

外壇で閻魔王に馬一匹を捧げて、三殿の宋帝王は安座する。

聖母を迎えたり、見送ったりする功労が大きい。自ら宝の馬をもらって俗世を加護する。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。

尖刀山、穀米山の門前に着いた。槐樹の蔭の下に多くの人がいる。

金童お兄さん、玉女お姉さん！

今来た処はどこか。苦難を受けている人たちはどんな人か。

神娘は蓮の花の座席にお座りなさい。ここの関のことを話して上げよう。

台詞　　神娘！ここは尖刀山、穀米山だ。槐樹の蔭の下には女の人が集まっている。尖刀山の上で苦難を受けているのは俗世で牛肉を食べた人たちだ。刀で牛の頭を刺し、刀で牛の喉を切るのは牛を屠殺する者だ。穀米山の罪人は米を無駄にする者だ。彼らはむやみにご飯をすてる。槐の蔭の下の女たちは、変てこな着物を着たり、鬼みたいな格好をしたりする者だ。こんな人たちはここまで押送されて苦難を受けている。

歌う　　俗世で悪事をした者は、冥土の役所でまじめに扱われる。

命数が尽きて亡くなって、冥土の地獄の門まで押送される。

お前の頭を刺し、お前の喉を切り、お前の皮肉を剥いで、苦しい刑罰を行う。

十八年の苦難を受けた後に、再び人間として俗世に生まれ変わる。

今話したのは他人でなく、俗世で牛肉を食べた、罪の重い人だ。

その根元を究めれば、俗世で牛を屠殺することを生業としたからだ。

俗世でお米を無駄にした者は、道の乞食として帰してやる。

神娘は、俗世からここに来た。俗世の罪人を戒めて下さい。

皆さん、いろいろの肉食を食べてもいいが、俗世で牛肉を食べるべきではない。

三十六の生業をやってもいいが、牛を屠殺する生業をしてはいけない。

お米は百姓のご飯をたくもので、俗世でお米を無駄にすべきではない。

俗世で善行を積み、必ずしもここで苦しめられるとは限らない。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。

左に長い旗、右に天蓋、白檀のお香のかおりが漂って道案内する。

第四殿の門前に着いた。四殿には五官王がいる。

五官大士王は出迎え、廬山の陳神娘を出迎える。

神娘！あなたは西天の仏の子で高貴な方、どうして俺の四殿に来たか。

わたしは李十三のために来た。彼女は難産で冥土に行った。

九回竜角を吹き鳴らしても生き返らなかった。李十三をわたしに返して下さい。

昨夜、四殿で審問したが、今日は五殿でその自供を聞かれる。

神娘は別れを告げて、閻魔王は見送って、廬山の陳神娘を見送る。

外壇で閻魔王に馬一匹、四殿の五官王は安座する。

聖母を迎えたり、見送ったりする功労は大きいから、自ら宝の馬をもらって俗世を加護する。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。

左に長い旗、右に天蓋、白檀のお香のかおりが漂って道案内する。

谷公山の門前に着いた。廬山の神娘は話し出す。

今来た処はどこか。どうしてその人たちは苦しめられているか。

神娘は蓮の花の座席にお座りなさい。ここの関のことを話して上げよう。

台詞 「神娘！ここは谷公山だ。苦しめられているのは俗世で仏を拝むお婆さんだ。」「こんなことを聞いて、どうも理解できないな。どうして仏を拝むことで苦しめられているか。仏を拝むと、そのうち悟りを開くはずだろう！どうして紫香山で仏を拝む者に会ってから、ここでまた仏を拝むお婆さんに会ったのか。」「神娘！紫香山の上にいた人たちは仏の名義でお金を騙し取る者だった。ここの谷公山の上では、読経を頼まれた時に、もっぱら他人のことをあれこれと批評して、読経せずに、ただお金をもらう者だ。」

歌う 俗世で出鱈目を言うのは自身の罪になって、谷公山の上で刑罰を受ける。

俗世でどんなことをしたか、冥土の役所はまじめに扱ってやるのだ。

命数が尽きて亡くなる。地獄の門まで押送され苦しめられる。

十八年苦しめられた後に、再び人間として俗世に生まれ変わる。

神娘は俗世からここに来た。俗世の罪人を戒めて下さい。
仏門に入って読経する気があれば、真心を込めて仏法を学ぶべきだ。
俗世で十分に福を享けてもいいが、仏門に入って、罪作りをしてはいけない。

俗世で善行を積み、必ずしもここで苦しめられるとは限らない。
内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。
左に長い旗、右に天蓋、白檀のお香のかおりが漂って道案内する。
第五殿の門前に着いた。五殿には森羅大士王がいる。

森羅大士は出迎えて、廬山の神娘を迎える。

神娘！あなたは西天の仏の子で高貴な方、どうして五殿に来たか。

わたしは李十三のために来た。彼女は難産で冥土に行った。

九回竜角を吹き鳴らしても生き返らなかった。李十三をわたしに返して下さい。

昨夜、十三は五殿で審問された。今日は六殿でその自供を聞かれる。

神娘は別れを告げて立つ。廬山の陳太陰を見送る。

外壇で閻魔王に馬一匹を捧げて、五殿の森羅王は安座する。

聖母を迎えたり、見送ったりする功労は大きい。自ら宝の馬をもらって俗世を加護する。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。
左に長い旗、右に天蓋、白檀のお香のかおりが漂って道案内する。

字紙山、金銀山、破銭山に着いた。神娘は話し出す。

金童お兄さん、玉女お姉さん！

今来た処はどこか。そこの人たちはどうして苦しみを受けているのか。

神娘は蓮の花の座席にお座りなさい。この関のことを話して上げよう。

台詞

「そこで苦しみを受けている人たちの中には、金銀の紙銭を売る人がある。彼らは劣悪な品でみだりにお金を儲ける。俗世で字を書いてある紙をみだりに捨てる人、銅銭を作る時に穴を開けない人もその中にいる。とにかく、文字を踏みにじる人、劣悪な品を売る人、粗末な物を作る人たちだ。」

歌う

俗世でお前はどんなことをやったか。冥土の役所はまじめに扱うのだ。命数が尽きて亡くなると、お前は十八年の苦しみを受けるようになる。十八年苦しみを受けた後に、お前を俗世へ生まれ変らせる。

貧乏な人はどんな人の生まれ変わった者か、それは金銀の紙を売る者だった。字の書いてある紙を踏みにじる人を、俗世の愚かな者に生まれ変らせる。

神娘は俗世から来た。俗世の罪人らを戒めて下さい。

商売をするには公正に取引すべきで、表面上では売って、ひそかに騙すべきではない。文字は万里の山河の一点の墨で、俗世で文字を踏みにじるべきではない。

俗世で善行を積みば、必ずしもここで苦しみを受けるとは限らない。

南游で功德を成し、済度を受けて銀錢をもらう。

罪を赦免し、恨みを消して災難を解除する。

内壇で紙錢三枚を捧げて、神娘と金童、玉女はそれを分けて享ける。

左に長い旗、右に天蓋、白檀のお香のかおりが漂って道案内する。

第六殿にの門前に着いた。六殿には正に卞城王がいる。

卞城王大士は出迎え、盧山の陳神娘を出迎える。

神娘！あなたは西天の仏の子でなんと高貴な方だろう。何のために俺の六殿に来たか。

わたしは李十三のために来た。彼女は難産で冥土に行った。

九回竜角を吹き鳴らしても生き返って来なかった。李十三をわたしに返して下さい。

昨夜李十三は六殿で審問されたが、今日は七殿でその自供を聞かれる。

神娘は別れを告げて、閻魔王は見送り、盧山の陳太陰を見送る。

外壇で閻魔王に馬一匹、六殿の卞城王は安座する。

聖母を迎えたり、見送ったりする功労は大きく、自ら宝の馬をもらって俗世を加護する。

左に長い旗、右に天蓋、白檀のお香のかおりが漂って道案内する。

門前に洗衣亭に着いた。盧山の神娘は聞き出す。

今来た処はどこか。どうしてここで苦しみを受けているか。

神娘は蓮の花の座席にお座りなさい。ここの関のことを話して上げよう。

台詞 「ここは洗衣亭だが、聞き苦しい言い方なら剥皮亭だ。一部分の金持は良心がなく、たくさんの絹などを出して、女郎買いや賭博をしたり、負債の人の着物を剥いだりして、悪事をはたらき、自分の贅沢な生活にだけ気をとらわれて、百姓を害する。」

歌う 俗世でそんなに悪事をはたらくなら、冥土の役所はまじめに扱ってやる。

お前の筋を引出し、皮を剥いで、山犬や犬に生まれ変らせる。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘は金童、玉女とそれを分けて享ける。

左に長い旗、右に天蓋、白檀のお香のかおりが漂って道案内する。

第七殿の門前に着いた。お経を聞く者は三本の線香を立てる。

三本の線香を立てば寿命が加えられ、福が高く、寿命が長くなる。

聖母は着いた、第七殿に。七殿には泰山王がいる。

泰山大士王は出迎え、廬山の陳神娘を出迎える。

神娘、あなたは西天の仏の子で、高貴な方だ。どうして俺の七殿に来たのか。

わたしは李十三のために来た。彼女は難産で冥土に行った。

九回竜角を吹き鳴らしても生き返らなかった。李十三をわたしに返して下さい。

李十三は俺の七殿で審問された。李十三はここに入ってから出られない。

わたし神娘に十三を助けさせてもらえばわたし神娘への恵みになることだ。

台詞 「わたしはもう間に合わないと心配したが、幸いに間に合った！間に合った以上、わたしに彼女を助けさせないことはないでしょう！」

歌う わたし神娘に十三を助けさせてもらえば、神娘へのお恵みになる。

十三は天上の法律に背いた罪をおかしたので、君に助けさせることはできない。

わたし神娘に十三を助けさせてもらえば、仏の顔に免じて、有り難く

思う。

君に助けさせないならどうするか。そうなら十四がさわがしいと言わないで。

わたし神娘に十三を助けさせないなら、あなたはここで安らかに休むことが許されない。

こんな激しい言葉を俺に使ってはいけない。俺泰山王は気にせず、驚くことがない。

台詞 「あなたはわたしを恐がると思ったが、わたしを恐がらないならいいのよ！あなたの泰山殿は長年の間修繕がされなかった。新しいのに換えて住んでごらんさない。」と神娘は言いながら、九子、九馬、九牛耕地の法を行うと、泰山殿はガラガラと音を出した。ほんとに可怕いことだ！

「神娘、止めて下さい！あなたのような立派な方がここに来て、助けさせないはずはない。陰陽官、太婆爺、牢屋を開けて、助けてやりたい人を助けなさい！俺はもともとあなたの廬山の法を試してみたかったから、そんなふうにしたのだ。」

「わたしを恐がるのは真のことで、わたしを恐がらないのは偽りのことだ。わたしが助けられるかどうか、お話を聞きたい。」と神娘は言った。

歌う 神娘は九牛の法で泰山殿を耕したから、君の若い命から三年の寿命を減ず。

台詞 「生死簿はあなたの手に握られているものだ、何年か減らしたいなら、減らしてもいい！」

歌う 内壇娘々馬一駕、廬山の神娘の若い寿命は減らされた。

台詞 李十三は血河で苦しみを受けている。

八殿都市王、九殿平等王、十殿転輪王に三回拝んでから、十殿を退出する。

歌う 外壇財喜馬両駕、暗闇の中で獄官は獄の門をあける。

内壇娘々馬一駕、廬山の神娘の明るいお姿が現われる。

台詞 血河、血汚、血紫池、血陰、血冷、五重の獄を通る。五五二百五、五五二つの五、零零照分派。

神娘は血河地獄に来た。血河は溢れている。重罪の人たちは髪の毛まで濡れ、罪の軽い人たちも胸まで濡れている。

「俗世の人たちはこんなに重罪を蒙っているのか。」と神娘は言うと、黄牛撞の法を行って、血河に突きあたってこわした！

神娘は血河に突きあたって、血河をこわした。血の流れが浅くなったので、重罪の人たちも胸までしか濡れないようになった。

歌う 神娘は血河をこわす重罪を犯したので、若い命から三年の寿命が減らされた。

内壇娘々馬一駕、廬山の神娘は若い命から寿命が減らされた。

「誰が李十三か。」と神娘は聞く。「わたしは李十三だ！」神娘はすぐに手を伸ばして彼女を引き上げようとした。「神娘、あなたは引き上げられない。彼女は千斤槌でそこにしっかり打込まれている！」

神娘はただちに度生の呪文を唱えだした。

「南無阿弥多婆夜、哆他伽多夜、哆地夜他、阿弥利哆婆毗、阿弥利哆毗伽蘭、哆伽弥膩伽伽那、快哆伽隸婆婆詞。」

歌う 聖母は超生の呪文を唱えだして、罪を赦免し、恨みを消して、千万の災難を解除する。

内壇娘々馬一駕、十三さまは獄の門を出る。

ここは正に血河獄で、血河地獄のことを話して上げよう。

血河地獄とはどういうところか。俗世の婦人は妊娠する。

妊娠しているうちに、川の流れて着物を洗う。

その汚水は竜王殿に染透したので、文書が十殿王に届けられた。

十殿の閻魔王は、そんな罪人らを責める。

命数が尽きて亡くなって、血河地獄の門に押送される。

十八年の苦難を受けた後に、人間として俗世に生まれ変わる。

人間として生まれ変わっても、男に生まれ変わることは絶対できない。

神娘は俗世から来た。俗世の罪人らを戒めて下さい。

妊娠した時には、部屋の扉を閉めて、着物を洗うべきだ。

下着が太陽や星に照らされてはいけない。血生臭いにおいが天につくと、罪になる。

俗世で善行を積み、必ずしもここで苦しみを受けて悲しむことはあるまい。

血河を通してから血汚獄についた。血汚地獄のことを話して上げよう。血汚地獄とはどういう処か。俗世の婦人は妊娠する。

台詞 「神娘！血汚地獄にいる罪人たちは、皆俗世で男の子を育てるが、女の子を生むと捨ててしまうのだ。溺死させてしまうか、首を絞めて殺す。」

歌う 六、七人の女の子を溺死させて、皆美人になるようなきれいな子だ。俗世で我がままなことをすると、冥土の役所はまじめに扱ってやる。命数が尽きて亡くなってから、血汚地獄まで押送されて、苦しみを受ける。

十八年血汚地獄で苦しみを受けた後に、俗世に生まれ変らせる。

人間に生まれ変わっても女の身になる。男に生まれ変わることは絶対できない。

神娘は俗世から来た。俗世の罪人らを戒めて下さい。

男の子を生むか、女の子を生むか、それは命数によることだ。俗世で女の子を殺すべきではない。

俗世で善行を積み、必ずしもここで苦しみを受けることはあるまい。今度通るのは血地獄、血池地獄のことを話して上げよう。

血池地獄とはどういう処か、俗世から押送されて来た凶悪な婦人だ。

台詞 「神娘！この血池地獄で苦しみを受けている女たちは、皆俗世で凶悪な女だった。彼女たちは隣人と不和になったり、喧嘩したりするので、分娩の時に世話に来る人がない。彼女たちは自分でお湯を沸して、自分で洗わなければならない。」

歌う 汚れのにおいはかまどの神を突いたので、文書が十殿王に届けられた。十殿の閻魔王は、このような罪人たちを責めた。命数が尽きて亡くなって、血池地獄の門まで押送されて苦しみを受ける。

血池の中に十八年浸った後に、俗世へ生まれ変らせる。

人間に生まれ変わっても、女になって、男に生まれ変わることは絶対でき

ない。

神娘は俗世から来た。俗世の罪人たちを戒めて下さい。

隣と仲よく付合って、分娩や子育てのことでお互いに手伝うべきだ。

俗世で善行を積み、必ずしもここで苦しみを受けて悲しむことはあるまい。

外壇財喜十八駕、十八の獄官は獄の門を開ける。

神娘は輪回獄を通して、光が現われて賑やかだ。

ここは正に炊蒸獄で、炊蒸地獄のことを話して上げよう。

台詞

神娘！炊蒸地獄とは人間を蒸器の中で蒸す処だ。その中にいるのは嫁で、そこに座って蒸器を焚くのはその姑だ。その家の新婦が嫁入りしたばかりの時に、その姑は、新婦がきれいな着物をあれこれ迷って着換えるのは面倒だろうと思って、百二十日過ぎてから彼女にきれいな着物を与えようと思った。案外に、その新婦は姑が彼女に不親切だと言った。彼女は実家の父の勢力を笠に着て、姑を虐待した。

歌う

上の梁が曲がっていれば、下の梁も歪む。新娘は戸を閉めて姑を殴る。

夕方、夫が家に帰ると、彼女はうそをついて夫を騙す。

家の姑はお金を家のために使わず、毎日お金を他の家に贈ってやる、と言う。

田を耕すにはただ田の底が漏れるのが気がかりだ。腐った魚や肉を姑に食べさせる。

俗世でどんな仕業をしたか、冥土の役所はまじめに扱ってやる。

命運が尽きて亡くなってから、炊蒸地獄に押送される。

お前の骨をガラガラと蒸して、悲しむかどうかとお前に聞く。

十八年の苦難をなめた後に、お前を俗世の人間に生まれ変らせる。

神娘は俗世から来た。俗世の罪人たちを戒めて下さい。

上の者が上に、下の者が下に、君が君の地位に、臣が臣の地位に在るべきだ。

俗世で善行を積み、必ずしもここで苦しめられることはあるまい。

前方には油鍋獄で、油鍋地獄のことを話して上げよう。

油鍋地獄とはどんな処か、俗世の軽薄な婦人たちが苦しみを受ける処

だ。

台詞 自分の夫があまり大人しいと憎んで、毎日他の人とつきあったりする。
油鍋地獄で苦しめられている婦人らは、皆悪辣な婦人だ。彼女たちは
食うことだけが好きで、なまけて仕事ぎらい。そして酷薄で残忍な者だ。

歌う 俗世でどんな仕業をしても、将来過ちはお前自身のこととなる。
命運が尽きて亡くなってから、油鍋地獄に押送されて苦しみを受ける。
十八年の苦しみを受けた後に、巢をかける蜘蛛に生まれ変って俗世へ
行く。

巢をかける蜘蛛がどんな人の生まれ変わったものか、と聞けば、それは
俗世の軽薄な婦人だった。

神娘は俗世から来た。俗世の罪人を戒めて下さい。

自分の夫の世話をよくすべきで、みだりに悪人とつき合ってはいい
ない。

他の人とつき合うのは役に立たず、老いると、お前のことなど忘れて
しまう。

俗世で善行を積めば、必ずしもここで苦しめられて悲しむことはある
まい。

前方には搗碓獄、搗碓地獄のことを話して上げよう。

搗碓地獄とはどういう処か。俗世の軽薄な男たちのいる処だ。

よく自分の妻が気に入らないと言って、いつも他の人とつき合ったり
する。

台詞 搗碓地獄で苦しみを受けている男たちは、自家の妻が好くないと強調
して、毎日他の家の女を気にかけて。今日はこの人と遊び、明日は別の
人と遊んで、数えきれないほどの女の人を玩弄した。毎日色気のあるこ
とばかり話して、全然正気でない。

歌う 夫のある婦人と不正をはたらくのは悪事だが、まだ母を離れない娘を
誘惑すべきではない。

多くの母を離れない娘を害して、まだ嫁入りないうちに妊娠させたり
した。

俗世でお前はごまかしていたが、冥土の役所はまじめに扱ってやる。

命数が尽きて亡くなってから、地獄の門まで押送されて苦しみを受ける。

搗杵でお前の腹を槌いたり、お前の胸を搗いたりして、ウンウンと鳴らす。

ひどく痛むか、どうかとお前に聞く。俗世で悪事をはたらいたから重罪が課される。

十八年の苦しみを受けた後に、お前を豚に生まれ変らせる。

豚がどんな人の生まれ変わったものか、と聞いたら、俗世の軽薄な男たちだった。

神娘は俗世から来た。俗世の罪人たちを戒めて下さい。

自分の妻と仲よく暮すべきで、三人の息子と四人の娘を育てると、頼りになるだろう。

他人の息子が大きくなると、老いたお前を捨ててしまう。

俗世で善行を積みば、必ずしも苦しめられて悲しむことはあるまい。

前方は銅床地獄だ。銅床地獄のことを話して上げよう。

銅床地獄とはどういう処か。俗世で妊娠した尼たちのいる処だ。

出身の家は貧乏だったので、目上の人には彼女を出家させた。

師は彼女を黄金の宝のように大切に、彼女を珠、玉のように世話をした。

十余歳まで育つと、案外にこの若い尼が変心した。

彼女にお経を教えても、彼女は読経せず、針仕事を部屋でする。

五月五日に腹掛を刺繍して、刺繍した腹掛を人に贈る。

刺繍したものを人に贈ってもかまわないが、男の人を誘惑すべきではない。

お前は三宝の仏の門下で、仏教の名声を汚すべきではない。

俗世でお前は暮して来たが、冥土の役所はまじめに扱ってやる。

命数が尽きて亡くなると、銅床地獄の門まで押送されて苦しみを受ける。

銅床の向かい側には鉄柱地獄があり、鉄柱地獄のことを話して上げよう。

鉄柱地獄とはどういう処か、俗世で邪惡な心を持つ和尚たちのいる処

だ。

こちらへ仏像を作るためにと言って布施をもらい、あちらへ鐘を铸るためにと言って、布施をもらう。

仏像を作るとか、鐘を铸るとか言いながら、魚や肉を買って自分で食べる。

魚や肉を食べても大したことはないが、紅やお白いを買って婦人に贈るべきではない。

お前は如来仏の門下で、仏教の名声を汚すべきではない。

命数が尽きて亡くなると、鉄柱地獄の門まで押送されて苦しみを受ける。

十八年の苦しみを受けた後に、お前を俗世の畜生に生まれ変らせる。

畜生がどんな人の生まれ変わったものかと聞けば、尼と和尚の悪い者だった。

神娘は俗世から来た。俗世の罪人らを戒めて下さい。

出家してお経を学ぶ考えがあれば、真心を込めて悟りの心を持つように勉めるべきだ。

もし、俗世の福を享けることが欲しいなら、修行や出家をしてはいけない。

塩を背負って苦塩地獄に行く。苦塩地獄とはどういう処か。

苦塩地獄のことを話して上げよう。俗世の凶悪な婦人たちはここに押送される。

彼女たちは眼中には男なし、男の人は罵られるばかりだ。

悪事をはたらいて失敗すると、自分が悪かったのに、かえって他の人を咎める。

苦塩を飲んで命を落として、俗世でごたごたを起す。

義理の父は婿を咎め、義理の兄は義理の弟を咎める。

家の財産が蕩尽されて、その過ちをお前自身が負うべきだ。

俗世でどんなことをしたか、冥土の役所はまじめに扱ってやる。

命数が尽きて亡くなると、地獄の門まで押送されて苦しみを受ける。

十八年の苦しみを受けた後に、お前を俗世の喘息持ちの人に生まれ変

らせる。

台詞 喘息持ちの人は前世に苦塩を飲んだ者だった。前方には銅鉤扎舌、挑嘴拔舌地獄がある。この地獄で苦しみを受けている者は、皆盗み聞く、人を唆す、人のあらを探す、でたらめを言うような、人を騙して危害を加える人だった。

歌う 俗世で争いをひき起こし、俗世で唆して争いを起こさせる。
皆の勧告を聞入れず、訴訟を起こして役人の処に行く。
俗世で争いをひき起こすと、将来お前自身はその過ちを負う。
命数が尽きて亡くなると、銅鉤扎舌地獄の門まで押送されて苦しみを
受ける。

銅鉤がお前の舌を刺し、心臓を刳って、誹謗をして人を罪に陥れるお前の応報だ。

十八年の苦しみを受けた後に、お前を俗世でいろいろ苦勞をする人に生まれ変らせる。

俗世で話しもできないような者はそんな人だった。

台詞 外壇で男女の冬着を配り、世徳堂両駕、紙錢一千七百枚。（『度生咒』や『心経』を唱える）

『度生咒』 （三行省略）

『心 経』 （十四行、省略）

歌う 内壇娘々両駕財喜両駕、十四、十三、金童、玉女は獄の門を出る。
外壇財喜馬十八駕、十八重獄官は獄の門を閉める。

一殿秦広王 二殿楚江王

三殿宋帝王 四殿五官王

五殿森羅王 六殿卞城王

七殿泰山王 八殿都市王

九殿平等王 十殿転輪王

十殿転輪王 九殿平等王

八殿都市王 七殿泰山王

六殿卞城王 五殿森羅王

四殿五官王 三殿宋帝王

二殿楚江王 一殿秦広王

外壇閻君馬十駕、十殿の閻魔王に捧げる。仏の子を出迎えたり、見送ったりした功労は大きく、自ら宝馬をもらって俗世を加護する。

神娘は望郷台に帰って来て、十四、十三はともに望郷台に来了。

台詞

「十三！」と神娘は言い出した。

歌う

ここは正に望郷台だ。望郷台から君の故郷が眺められる。

君は望郷台で待って、わたしは竜角を吹き鳴らして君を帰郷させる。

十三は望郷台で待ち、神娘は法を行って獄の門を出る。

神娘は李十三の部屋に来て、その魂を取り戻すようにした。

李大人はこのありさまを見て嬉しくなって、神娘に聞き出す。

神娘は冥土から帰ってよかった。李十三を生き返させることはできるか、どうか。

わたしは九匹の牛が田を耕す法で泰山殿をこわそうとしたから、若い寿命から三年減らされた。

血池を突破って、大罪を犯したので若い寿命から三年減らされた。

若い寿命から六年減らされて、十三を助けて故郷に帰らした。

十三は望郷台で待っていて、三回竜角を吹き鳴らすと帰郷できる。

「おお！そうか！」と李大人は言って、非常に喜んだ。

庁堂で祖師の供え台をしつらえて、壇に立ち、法を行って人を助ける。

神雲と神額を頭にかぶり、神衣と神袴を身につける。

足もとに占い具をおき。手で印を結び、口で盧山の玄妙な法のお経を唱える。

九層の台に変じられる九枚の紙、四本の竹に変じられる四本の灯心草を取出す。

三に三をかけて、手で九回続けて印を結ぶと、九枚の紙が九つの卓に変じた。

灯心草が竹に変じて柱になり、九つの卓が重なって九層の高さになる。

手で千変万化の訣をして、九層の台が高々と聳える。

神娘は九層の台に飛び上がって、しっかりと台の真中に立つ。

左の手に鈴を持ち、右の手に竜角を持って、四方を眺めながら竜角を吹き鳴らす。

始めて竜角を吹き鳴らすと、その音がびいびいと霊壇にひびく。

二回目の竜角がびいびいとひびくと、その音が廬山、茅山にひびきわたった。

三回目の竜角がぶうぶうとひびくと、その音が望郷台にひびきわたった。

李十三は竜角の音を聞くと、急いで香壇に上がる。

内壇娘々馬一駕、十三さまは生き返った。

生き返って手足がひくひく動きだし、顔立ちももとのようになった。

生き返ってしゃっくりもでき、声を出して、続けて大声で叫ぶ。

十三は亡くなって苦しかったが、どこからの恩人が助けてくれただろう。

廬山の神娘が助けてくれた。あなたはどこからの方、お名前は何というか。

わたしは福州の候官県、臨水中村の陳姓の者だ。

父の名前は上元、母の苗字は葛と言ひ、長兄は法通、次兄は法青と言う。

長兄は南江の蛇妖退治で蛇妖に食われた。次兄はこの凶報を家に伝えた。

長兄を救うため廬山に登って、師の奥さんはわたしを神娘と名付けた。

十三歳で廬山の法を学んでから、三年法の伝授を受けた後に洞門を出た。

洞門を出ないうちに口の秘訣を習得した。先に庶民を救ひ、次に兄を救う。

神娘が悟りを開く時に、お香を受け、福をもたらしして、ここの宮で休もう。

道中妖怪退治をして来て、わざわざ李十三お姉さんを助けてあげた。

台詞

「神娘！あなたは家の娘を助けて下さった。娘に法を伝授してもらえないか。」「お宅の娘さんに法を伝授しよう。李十三お姉さんは法の伝授

を受けて、自ら保生聖母のことを司る。難産の人があれば、彼女が平安に分娩し、男の子なら端正な顔つき、女の子ならきれいな顔立ちであるように加護してやりなさい！」

「神娘にお礼を申す。」

歌う

内壇娘々馬一駕、保生聖母李太陰。

李宅は庁堂で祝宴を催して、廬山の陳太陰をもてなす。

李大人は千両の銀を出して、神娘にお礼を申す。

わたしに謝礼を言うには及ばないが、南江で蛇を斬殺して兄を救う場合に救助してもらいたい。

神娘はわたしの大恩人お姉さんで、神娘を援助するのはあたりまえのことだ。

内壇娘々馬一駕、李宅の庁堂で法の本を写す。

法の本を写して十三に読ませ、聖母は廬山の法を伝授する。

神娘は黄い風呂敷包みを肩にかけて、十三に別れを告げて旅立つ。

李宅の老若は見送って、廬山の陳太陰を見送る。

内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と汪、楊の二人の將軍はそれを分けてもらう。

神娘は太陽仏が水に落ちた処まで来て、俗世の凡人は知らないが、仙人は分った。

監察星官は雷音寺で、大悲観世音に上奏する。

大慈大悲雷音寺、監察は一枚の上奏書を呈する。

仏の子陳十四が、道中で妖怪退治して人を助けて来た。

三年間妖怪退治して人を助けて来た。

南江殿で蛇妖を斬殺して兄を救うようにと彼女に指図を与えるように願う、と上奏した。

香山仏母はこの上奏を許して、監察星に捧げる。

雷音に上奏した功劳は大きい、自ら宝の馬をもらって俗世を加護する。

内壇大士一駕雲一片、香山仏母は雲に乗る。

仏の子の竜鳳の占いを取戻し、二人の將軍を廬山に帰す。

内壇小衆神兩駕、汪、楊二人の將軍は神の門に帰る。

祖師は彼女のことを聞くと、俗世の男女を加護し、世の太平を保つ。

神娘は太陽仏が水に落ちた処まで来て、急いで高い山林に登って行く。

台詞

観音は一人のお婆さんに化して、青風山の峰に作り出した一つの茅屋の中で十四を待つ。

「太陽は水に落ちた。ここはどこだろう。」と神娘は二人の将軍を呼んだ。「お二人の将軍！お二人の将軍！」と呼んでも答えがない。竜鳳の占いをしてみると、占いもだめだ。神娘は峰まで行って、前方にはかすかな灯の影がある。神娘は灯の影の方へ行くと、前に一つの茅屋がある。神娘はその前で呼んだ。「おばさん！おばさん！」「あんたは誰か。」「わたしは廬山の法を学んだ神娘だ。道中で妖怪退治して人を救助して来た。今、暗くなった。お家で休ませてもらいたい。どうぞ戸を開けて下さい。一夜を過したら、明日家に帰って行く！」